ハーヴァード便り

秋　田　　稔

秋田稔助教授は，ハーヴァード燕京研究所の招聘により1959年夏以降同研究所で研究を続けておられるが，この程日高所長に宛てて研究の模様その他について便りを寄せられた。同助教授ならびに日高所長の諒承を得て以下に紹介する。

編集委員記

第一信（12月14日付）

（前文略）　こちらに来て4カ月，大学の授業がはじまって2カ月半，いよいよ勉強の方も軌道にのってきた感じで，大いに張切っております。今日はごく簡単にでございますが，私の当地での研究の進行の具合をご報告申し上げたいと思います。

さて「人間形成のキリスト教的基礎」の研究という課題をかかげて当地にまいり，ICUでの今までの勉強をもう一度根本的に考え直して，新しくまとまったものに仕上げるつもりで，先ず，この2カ月の間に，Paul Tillich, Paul L. Lehmann (New Testament Theology and Ethics), James L. Adams (Christian Ethics), G. Ernest Wright (Old Testament), Robert Ulich (Education & Religious Education) の諸教授に次々と直接にお目にかかり，私の今までの研究の概略，今後の方針私案のあらましをお話しし，アドヴァイスと示唆をお願いいたしました。各教授より，それぞれ異った視点からの適当な研究上の示唆をいただき，文献を教えていただいたりして非常に有益でしたが特に Paul Lehmann 教授とは，考え方の上でもお互に共感し合うところがあり，関心の焦点も同じようなところにあって，よき師にめぐり合いたるかなの感を強くいたしました。

私は，先ず，基礎研究として「人間形成のキリスト教的基礎」研究の方法論とでもいうべき分野を手がけています。これは，当然キリスト教信仰のパースペクティヴからの「人間」研究の根本問題，その根本性格とその根拠といったようなことをとりあげることになりますが，これは神学と人間学のかかわりの問題でもありますので，かなり骨のおれるものです。幸い，レーマン教授がこの面で非常に力になっ

て下さるでしょうし，私がずっと考えてきた線をもっと徹底しておしすすめるという方向で大体よいと思われますので，多分所期の目的を達し得るだろうと考えております。文献もかなり豊富ですし，このところ一日の大部分をこの文献読みについやしています。

この方法論の問題と並行して，その実質的内容をなす旧約，新約の人間の把握の仕方と，そこでの人間像の研究もはじめています。旧約の面では，G. E. ライト教授より多くのことを学ぶことになりそうです。教授は旧約の人間理解の問題にご自身でも非常に力を入れて勉強しておられるようで，その著書の一つ The Biblical Doctrine of Man in Society は，簡単なものですが，分野もきわめて広く，且つ見方も公平であり，特に旧約人間観の特色と，その新約との関わりを，実に鮮かに描き出しています。新約神学方面でのレーマン教授，そして今休暇でスカンジナヴィアにお帰りですが，私の研究に関心を示して下さる新約学のステンダール教授よりの研究上の示唆によって，新約の人間理解の方面も何とか型をつけられるよう努力しています。勿論全体的な完成など思いもよりませんが……。全般的なことについては，主として，アダムス教授がリサーチ・アドヴァイザーといった立場にたって色々アドヴァイスして下さっています。教授の紹介で，来春1月半ばの，ボストン地区倫理学関係教授の会合，及び，1月末のニューヨークでの全米ソーシャル・エシックス教授の会議にも出席することになると思います。

これら基礎論の研究と共に，実際的な面では，ハーヴァードでは，一体その理想とする liberal education と Christian faith とがどういう根本的なかかわり方をしているか，ということを現在関心をもって見ています。これは「大学の理念」に関わりをもったことであり，私の基礎研究より当然展開すべき具体的な問題に関連してくることでもありますので，この目でよく現実を見極めたいと思っています。大学教会と，大学教育との関係という ICU 自体が当面している問題にも，これは関係してくるので，色々考えさせられています。そのうちにこの方面のこともご報告申し上げたいと思っています。

以上，ごく簡単なあらましをおしらせいたしましたが，恵まれた環境の下で思う存分考え，学ぶことの出来ることを心から感謝しています。

当地での私の研究もようやく軌道にのりはじめたところですが，もしゆるされるならば，更に半年か1年この地で勉強を続けさせていただきたいという希望をもっています。これは大変わがまま勝手なお願いでございますが，1960—61年度も，も

しおやすみをいただければ幸いだと思います。ハーヴァード燕京のヴィジティング・スカラーの1年（あるいは半年）延長を願い出てみようかと思っておりますが，いかがなものでございましょうか。どうぞよろしくお願い申上げます。

また，豊富な文献をみるにつけても，何とかICUに「教育のキリスト教的基礎」に関係した文献をそろえたいものと思っています。これには相当費用も要することですし，図書館の通常予算の範囲内では，とても無理でしょうから，何か特別な援助でも，例えばDanforth Foundationとかその他宗教教育に関心をもった機関からの援助でもえられればと思っています。

私の勉強は全く未熟なとるにたらないものですが，それでも何らかの意味で，日本のために役に立つことだと信じていますし，特にICUとして，日本のために役立つ研究課題のうちの一つに，私が今手がけはじめていることも入れていただけると思っております。長先生の日本人の生き方と，キリスト教信仰とのぶつかり合いの問題と，うまく結びつけられれば，きっと面白いことになるだろうと思ったりしています。

以上，本当に勝手なことを申し上げましたが，どうぞよろしくお願い申し上げます。（後文略）

第二信（3月16日付）

（前文略）色々ご配慮いただきましたHarvardのVisiting Scholarの1年延長の件，すでにご存知と思いますが，The Faculty Meeting to the Visiting Scholars Programより正式に承認されました。今年延長を認められたのは，日本人のVisiting Scholarでは私一人だけで，光栄に思っています。いそがしいICUのことを思うと，申しわけがない気がいたしますが，それだけに責任の大きいことを感じます。Harvardでは過分の厚遇をうけ，研究上のあらゆる便宜をはかっていただいておりますので，この地での二年の研究生活は，有意義な，実りの多いものになるだろうと自ら期待しておりますし，またそうしなければならないと思っています。どうぞしばらくのわがままをお許しください。

次に近況をご報告申し上げたいと思います。

少し前になりますが，1月29日，30日New YorkのUnion Theological SeminaryでAmerican Association of Christian Social Ethicsの会合があり，私も招かれて，HarvardのProf. James L. Adamsと一緒に出席させていただきま

した。これはアメリカの大学,神学校の Christian Social Ethics の Professors の専門的な会合であり，40人位のものが一堂に会して Dr. Reinhold Niebuhr の主題講演をきき，Panel Discussion したり，自由討議をしたりして，本当に有意義なときを持ちました。アメリカの指導的な，そして中堅どころの倫理学者が殆ど集まり，はげしい，しかしなごやかな議論に，時を忘れる程でした。Christian Ethics とは何かという最初に出され，また最後に答えられるべき問をめぐり，Social Sciences あるいは Anthropology, Social Ethics と，Theology との関連の問題で色々議論がわかれ，丁度私自身が問題としている人間形成のキリスト教的基礎の問題に色々の角度から光が当てられて，本当によい集りでした。少人数で，それだけにきりっとしまった感じの会合でした。New York でのもう一つの大きな収穫は，Yale 大学の Christian Higher Education の Professor である Dr. Dirks にゆっくりお目にかかって色々お話をうかがうことが出来たことです。Yale でお目にかかる筈でしたが，時間の都合で New York でお目にかかったわけです。先生の問題としていることと私の問題とがおどろくほど似ており，実に多くの示唆と，そして研究を進める上の勇気とを与えられました。今後も色々と連絡をとって下さるとのことで，心からうれしく思いました。折がありましたら，Dr. Dirks のような方に I CU の大学院で Religion in Higher Education とか Christian Philosophy of Higher Education というようなことについて講義をしていただくとよいと思います。（後文略）